第60 回関東高等学校演劇研究大会（松本会場）
作新学院高等学校演劇部　上演台本

唐揚満足の姉妹

作：高梨辰也

［登場人物］

藤井弘治　弁当屋「唐揚満足」の主人
藤井宏美　三つ子姉妹の長女
藤井瑠美　三つ子姉妹の次女
藤井亜美　三つ子姉妹の三女
成瀬幸恵　唐揚満足に長く務めるバイト
車田大輔　唐揚満足の常連であるトラック運転手
永島美希　唐揚満足に迷い込んで来た女の子
永島敦子　美希の母親
森　康秀　宏美の彼氏
小野佳菜子　近くの老人ホームに定期的に通う女性
溝島吾郎　弘治がかつて務めていた会社の同僚

［場所設定］

高速道路と国道が交わる、ある田舎町にある弁当屋である。
「唐揚満足」という名前の通り、からあげが自慢のお店である。

［参考文献］

ドストエフスキー 原作／郷原玲 脚色「カラマーゾフの兄弟」
大垣ヤスシ「ジャンバラヤ」（高校演劇Selection 2001 下　収録）
阿部順「桜井家の掟」（高校演劇 Selection 2003 下　収録）

【平成１６年３月９日】

幕が上がる。
ある田舎町にある弁当屋の、自宅兼事務所。
県立高校の合格発表の日の、夕方である。
同じ制服を着た三人の姉妹が、深刻な表情で、向かい合っている。

亜美　ごめんなさい……
瑠美　わかったから、もう謝らないで。
宏美　そうよ、泣いたって結果は変わらないんだから。
瑠美　ちょっと、そういう言い方はなくない？
宏美　だってそうでしょ。じゃあ何、わんわん泣いてたら、不合格が合格になるっての？
瑠美　そうは言ってないけど、
亜美　本当にごめんなさい、三人で一緒の高校に行こうって、お姉ちゃんも、あんなに一生懸命やってたのに、私だけ……（泣きじゃくる）
宏美　だから泣いたって現実は変わらないって言ってるでしょ。
瑠美　よく言うよ、小さい頃あんなに泣きまくってワガママ通してたくせに。
宏美　なんか言った？
瑠美　べっつにー。（厨房にコーラを取りに行く）
亜美　……私、どうしたらいいのかな。
宏美　どうしたらって、そりゃ、受かってる私立のどっかに行くしかないでしょ。
瑠美　（戻って来て）まあ、現実的にはそういうことになるわけだけど。
宏美　押さえてるの、清新だっけ。ライフマネジメント。
亜美　そうだけど……お姉ちゃんふたりで県立に行く。私だけ、清新学院。違う制服。（また泣きそう）
宏美　あー、泣くぞ、すぐ泣くぞ、絶対泣くぞ、ほら泣くぞ。
瑠美　姉ちゃん亜美をいじめないの。
宏美　ごめんって。っていうかそれ売り物。
瑠美　あとで二百円入れとくから。
宏美　絶対入れないでしょ。
亜美　……。
瑠美　あのさ、ここでちょーっと、提案なんだけど、
宏美　なに、
瑠美　私もさ、違う学校に行くってのはどうでしょう。
亜美　えっ、
宏美　はあ？
瑠美　私たち三人で同じ学校に行くってことはもうないわけでしょ？だったらさ、私、実は行きたい学校があったんだよね、私立で。
亜美　だめだよ、そんな、私のせいで、

瑠美　亜実のせいじゃなーい。私、そこまで進学校にこだわる理由ないしさ、なんなら部活続けたかったんだよね。
宏美　え、あんたまだピンポンやるの。
瑠美　ピンポンって言うな、卓球！
亜美　え、じゃあ、中央学園？
瑠美　そ。よくない？
宏美　ちょっとそれ本気で言ってんの。
瑠美　まあ、私には選ぶ権利があるわけだし？
宏美　でもお父さんがなんて言うか。ほら、ふたりも私立に行ったら、経済的に、ねえ？
瑠美　まーそれはちょっとは申し訳ないと思うけどさ、いま私が一番行きたいの、そこなわけだし。
宏美　私だってうちの経済事情はよくわかんないけど、でもこんなしがない弁当屋がね、
瑠美　しがない（笑）
宏美　しがないでしょ！そんなに儲かってるとは思えないんだけど。
瑠美　じゃ、わかったよ。相談してみて、いいって言ったら、決まりってことで。
宏美　絶対厳しいって。
瑠美　もしかして姉ちゃん、私がいないとさびしい？
宏美　さびしくない。
瑠美　引き留めるなら今のうちだぞー。
宏美　こっち来んな！
瑠美　はいはい、言われなくてもそうしますよーだ。
亜美　（瑠美に）お姉ちゃん。
瑠美　大丈夫、大丈夫。いやー、なんか決断した後って、すっきりするねえ。
宏美　はあ。ついに私たちも別々の道を行く時が来たのね。
瑠美　何よ急に改まって。でもそうよ、亜美。これからはね、私たち、自分で自分の人生を切り拓いていくのよ。
亜美　人生を、切り拓く。
瑠美　そ。じゃあ乾杯しよっか。コーラ取って来るねー。（厨房にコーラを取りに行く）
宏美　ちょっと、だからそれは売り物、
亜美　（宏美に）お姉ちゃん。
宏美　……何も変わらないわよ。別々の学校に行っていようが、みんな帰るとこはここなんだから。
亜美　……うん。
瑠美　（戻って来てコーラを配る）はいこれ、これ。
宏美　合計六百円。
瑠美　え、自分の分は出すでしょ？
宏美　あんたが勝手にやってることでどうして私が金を出すのよ。
瑠美　うわ、ケチな姉、
宏美　たかが数分早く生まれただけでしょ。

瑠美　はいはい、じゃあ、気を取り直して、乾杯のご準備を。では、長女、宏美さんから、一言ドーゾ。

宏美　ったく……あー、まだお父さんの決済は得られていませんが、とにかく、私たちは、別々の高校に入学することになりそうです。

瑠美　お父さんが、いい、って言ったらね。

宏美　これまで同じ道を歩いてきた私たちですが、果たしてこれからどうなってしまうのでしょうか……乾杯！

瑠美　ちょいちょいちょい！全然景気良くないよ、それ、

亜美　乾杯！

瑠美　あああもう、乾杯！

三人、コーラを飲む。

三姉妹　かーっ！キンキンに冷えてやがるっ！

そこに弘治が帰ってくる。

弘治　ただいま。（盛り上がる三姉妹を見て）おお、この様子だとみんなうまくいったみたいだな。

三姉妹　うっしっし……

弘治　じゃあ、改めてお父さんに聞かせてくれよ。みんな、どこの高校に行くことになったんですか。せーので。はい、せーの。

宏美　（同時に）栃宮女子。

瑠美　（同時に）中央学園。

亜美　（同時に）清新学院。

弘治　いい！？

幸恵に明かり。

幸恵　１９８９年、１月８日、平成が始まったこの日に、この三人はおぎゃあと産声をあげました。三つ子の姉妹です。あ、私、お母さんじゃないですよ。私のことは、まあ、おいおいで。ここは、高速道路と国道が交わる、ある田舎町にあるお弁当屋さん。お店の名前は「唐揚満足」、その名の通り、唐揚げが自慢のお店です。

宏美に明かり。

幸恵　三姉妹の長女、宏美。三姉妹の中で最も成績優秀。地元の進学校に危なげなく合格。といっても、そんなに勉強しているわけでもなく、教科書よりも少女漫画の方が似合う、ちょっとわがままで、なんだかんだ妹想いのお姉ちゃん。

瑠美に明かり。

幸恵　次女、瑠美。中学では卓球をやってて、実は関東レベルの実力者。でも旺盛すぎる好奇心のせいで、いろんなことに手を出しては失敗ばかり。それでもめげない天真爛漫な性格の持ち主。

亜美に明かり。

幸恵　そして今回、ひとりだけ高校入試で失敗してしまった、三女、亜美。引っ込み思案で、そのつもりはないのについ自分より他人を優先しちゃうみたいな、そういういじらしい妹。

幸恵、前を向いて。

幸恵　前置きが長くなりましたね。というわけで、これは、いかんともしがたい平成の時代を駆け抜けた、唐揚満足の姉妹（きょうだい）の、

全員　恋しさと、

幸恵　せつなさと、

亜美　心強さと、

瑠美　からあげの、

宏美　お話です。

幸恵

全員

音楽。（篠原涼子 with t.komuro「恋しさと せつなさと 心強さと」）

うす暗い明かりの中、場面転換。

【平成１６年7月6日】

明かりがつくと、場面は初夏の昼間になる。

事務所に幸恵と大輔がいる。

幸恵　平成１６年、7月6日、と。領収書これでいい？

大輔　あいよ、どうも。

幸恵　いつもありがとうございます。

大輔　ああー、満足満足。ここの唐揚げを食ってる時だけが、俺の生きてる時間だー。

幸恵　そんな大げさな。

大輔　姉ちゃんさ、仕事にやりがいとか、言うだろ。でもさ、俺らみたいな長距離トラック

の運転手はさ、毎日毎日似たような高速の景色眺めて生きてるわけよ。そんな中で、どこにやりがいを見出すか……コレだよ。俺たちは、飯で生きてるわけよ。

幸恵　いつでもゆっくりして行ってくださいね。

大輔　わりいね、毎度毎度、こんな事務所まで上がり込んで。

幸恵　常連ですから、車田さんは。

大輔　今日、コウちゃんは？

幸恵　ああ、配達に行ってます。なんか近所でイベントがあるみたいで。

大輔　へえ、昔じゃ配達なんてやってなかったのにね。ここで受け取りだけだった。

幸恵　最近はよくあるんですよ、配達。

大輔　そりゃ、姉ちゃんに店のこと任せられるようになったからだろ。すっかり信頼されて。だってもう何年？

幸恵　もう5、6年はいますね。

大輔　そうだよなあ。え、それで身分的にはバイトなの？

幸恵　まあそういうことになりますかね。

大輔　そりゃちょっとよくないんじゃないの、しっかり雇ってもらわないと。シャチョーさんに。

幸恵　いや、いいんです、私は。隣のアパートとか紹介してもらってすごく助かってますし。

大輔　（おどけて）おいしいからあげがあれば、それで。

幸恵　あ、そう？

大輔　はい。

幸恵　からあげったってねえ……

そこに弘治が帰ってくる。

弘治　あちー、ただいま。おー、車田さん、久しぶり。

大輔　おー、あやうくコウちゃんの顔見ないで帰るとこだったよ。（空の弁当の容器をひょいと持ち上げて）今日もごちそうさん。

弘治　どうも。あ、ごみそこでいいですよ。

大輔　わりいね。あ、コウちゃん、幸恵ちゃんから聞いたよ、ずっとバイトのままこき使ってるんだって？

幸恵　だから、私は、別に。

大輔　幸恵ちゃんだってさ、将来に向けてお金貯めたりとか、そういうのあるんじゃないの。ほら、いつかは結婚、とかさ。

幸恵　やだ、車田さん、余計なお世話です。

弘治　確かになあ。まあ実は、こんなに長く続くとは思ってなかったっていうか、

幸恵　え？

大輔　このお店が？

弘治　ああ。

大輔　おいおい困るよ、この店がなくなったら。みんな悲しむよ。

弘治　そうかい。（ラジオをつけに行く）
大輔　頼むぜ、シャチョーさん。
弘治　やめろよその呼び方。

弘治、ラジオをつけると、アテネオリンピックの見どころを紹介している。（付録①）

大輔　お。アテネオリンピック。どうかね、日本。コウちゃんちはあれだろ、（ジェスチャーをして）野球。
弘治　まあどれかって言ったらそうですね。
大輔　子どもらも見るの、普段。
弘治　見るけど、それが、大変なんですよ、
大輔　なんで、
弘治　そりゃあねえ、
幸恵　三人とも好きなチームが違うから。
大輔　そりゃ大変だ。
幸恵　宏美が中日、瑠美が阪神、亜美が横浜。
大輔　なんでそんなことになっちゃったの。で、コウちゃんは、あれだろ。
弘治　近鉄。
大輔　パ・リーグかいっちゅうね。
弘治　これで俺がセ・リーグにいったら家庭崩壊するでしょう。
大輔　でもあれだろ、（新聞を指しながら）近鉄、オリックスと統合するんだろ。
弘治　あー、それ、どうなるんでしょうねー。
幸恵　（時計を見て）あ、店長、そろそろ三人、帰ってきますよ。
弘治　あ、そうか。
大輔　え、こんな時間に？早帰り？
弘治　今週は保護者懇談があるから、午前中授業なんだって。三人とも。
大輔　じゃ、コウちゃんも行くわけだ。保護者なんとか。
弘治　それがまたさ……この一週間のあいだに三校まわるわけ。月・木・金と。中学まではさ、三人まとめて同じ日にしてもらったりしてたんだけどさ。
大輔　はー、そういう大変さがあるんだ。家族もいない俺にはわからんけどね、ま、がんばれよ、お・と・う・さ・ん。
弘治　はいはい。
大輔　そんじゃ、俺は子どもらが帰ってくる前に退散、退散、と！
弘治　まだゆっくりしていけばいいのに。
大輔　こっちも仕事中だからね。そいじゃ、また来るよ。
弘治　はいよ。それじゃあ。
幸恵　ありがとうございました。
弘治　あ、じゃあ俺ちょっと上いるね。
幸恵　わかりました。

弘治、階段を上がっていく。
幸恵、大輔の弁当の容器を拾って、厨房へ。
大輔、外に出ようとすると、宏美と鉢合わせし、挨拶を交わす。
ラジオのトークが終わり、音楽。（ゆず「栄光の架け橋」）
誰もいなくなった事務所に、ちょっとギャルっぽくなった宏美が帰ってくる。

宏美　あつー。……またつけっぱなし。（ラジオを止める）

幸恵、戻ってくる。

幸恵　あ、お帰りー。
宏美　ただいまー。あれ、まだ来てない？
幸恵　瑠美ちゃんと亜美ちゃんならまだだけど。
宏美　なーんだ、大事な話をしようと思ったのに。
幸恵　大事な話？
宏美　そ。あ、幸恵さんにもその時に。
幸恵　えーなになに、
宏美　みんなそろったらで。
幸恵　ふたり部活なんじゃないかな。
宏美　あーそうか。亜美のボランティア部はいいとして、ピンポン部は長そうだなー。
幸恵　ピンポンって言うと怒るよ。
宏美　なんでー、「ピンポン」って、映画にもなったじゃん。窪塚洋介ね。
幸恵　でもほら、オリンピックでも卓球って言ってるわけだし。
宏美　卓球、卓球ね……あれ？

厨房から美希が覗いている。

幸恵　わ、びっくりした、え、どこから入ったの？
美希　……（厨房の向こうにある入り口を指差す）
幸恵　そりゃお店の方からか。え、お弁当、買いに来たのかな？
美希　……（首を振る）
宏美　えっと、もしかして、あれかな……迷子？
美希　……（きょろきょろして、頷く）
幸恵　あららら、なんでまたこんなところに。とりあえずほら、座りなよ。暑かったでしょう。いま麦茶持ってきてあげるから。
宏美　あ、私やるよ。麦茶ね。
幸恵　いい？ありがとう。

宏美、厨房の冷蔵庫に麦茶を取りに行く。

幸恵　えっと、お名前は？
美希　……（きょろきょろ）
幸恵　大丈夫だよ。緊張しないで。ここは、お弁当屋さん。
美希　……（幸恵を見る）
幸恵　「唐揚満足」っていうの。あ、からあげは好き？
美希　……（頷く）
幸恵　お、そうか。

宏美、麦茶を持ってくる。

宏美　まだちょっとぬるいかもだけど、
幸恵　ごめん、あのさ、からあげ、ちょっと持ってきてくれる？
宏美　え、からあげ？
幸恵　いいからいいから。
宏美　はあい、

宏美、ふたたび厨房へ。

幸恵　うちのからあげはおいしいぞぉ。

宏美、からあげの乗った小皿を持って出てくる。

宏美　これでいい？はい、どうぞ。
幸恵　ありがと。めしあがれ。

美希、おそるおそるからあげを食べる。

美希　……おいしい。
幸恵　でしょう？ようやくしゃべってくれた。
宏美　よかった。
幸恵　さ、改めて聞くけど、お名前は？
美希　永島美希です。
宏美　どこから来たの？
美希　あっち。
幸恵　あっちじゃわからないなあ。
宏美　え、なんでこんなところに来ちゃったの？
美希　えっとね……、

幸恵　うん、
美希　学校終わって、それからこれ、買いに、行ったんだけど。帰る時に、違うバスに乗っちゃって、知らないところで。すぐ降りたけど、なにもなくて、
幸恵　そうかそうかー。それは怖かったね。
宏美　どうしよ、あ、お父さん呼んできた方がいいかな。
幸恵　そうだねえ、
宏美　行ってくる。

宏美、階段を登っていく。

幸恵　それ、食べちゃいなよ。
美希　これね、おいしいけど、お母さんがつくるのと、ちょっとちがう。
幸恵　お、わかる？からあげってさ、作る人によって、ちょっと違うんだよ。
美希　そうなの？
幸恵　美希ちゃんのお母さんは、どんなからあげを作るの？
美希　うーんとね、すごくおいしいの。
幸恵　お、いいねえ、
美希　でも、最近お母さん、全然つくってくれなくて、
幸恵　そっか……。

弘治が階段から降りてくる。

弘治　おー、どうした。
幸恵　バスに間違って乗っちゃったんだって。
弘治　んーそうか。えっと、電話番号はわかる？
美希　うち、誰もいないよ。
幸恵　そうなの？
美希　お母さん、仕事遅いの。
幸恵　えっと、住所は？
美希　住所……あっ、（財布を取り出す）
宏美　お、持ってる？
美希　ここにお母さんが書いてくれたのが、
弘治　どれどれ。お、これだな。和泉町（いずみちょう）か……。まあバスで帰れるけど、じゃああれだね……送って行こうか。
幸恵　え、いいんですか。
弘治　いいよ、今日の仕事はひと段落したし。まあ、もし誰か来たら、よろしく。
幸恵　あーはい、わかりました。
弘治　ついでにちょっと買い物すまして来るから。
宏美　あ、お父さんシャンプーなくなった。

弘治　はいはい。
宏美　ラックスだからね。テキトーに違うの買ってこないでね。
弘治　どれでも同じだろ。
宏美　違います。ホント、わかってないんだから。
弘治　はいはい。（美希に）じゃ、行こうか。
美希　いいの？
弘治　いいよ。ほら、こっち。じゃ、行ってくるね。

美希、ちょこんとお辞儀をして、弘治の後についていく。

宏美　えーカワイイ。小学2年生くらいかな？
幸恵　学校って言ってたもんね。
宏美　……あ！
幸恵　なに？
宏美　それ。

宏美、美希が置き忘れていった紙袋を指差す。

宏美　あの子が買ってきたってやつ。
幸恵　追いかけなきゃ。

弘治の車が店の前を通り過ぎる音。

宏美　あー行っちゃったよ。
幸恵　どうしよ、コレ。大事な物かな。
宏美　こういうことがあるから携帯持った方がいいって言ってんだよ。
幸恵　確かにね。あ、でも店長のことだから、携帯買ってもどうぜ不携帯にしちゃうでしょ。
宏美　あー絶対そうだ。っていうかまず私に携帯買えってんだよな。
幸恵　そんなに携帯ほしいもんなの？
宏美　そりゃそうだよ！みんな、高校入学のお祝いにって買ってもらってんだよ。あー、私もほしー、505i（ごーまるごあい）。
幸恵　よくわからないけど。
宏美　だってすごいんだよ、カメラの性能とかもどんどんよくなってるし。
幸恵　携帯にカメラがついてるって時点でびっくりだけどね。で、コレなんだけど……ちょっと中身確認しとこっか。
宏美　え、見るの？
幸恵　生ものだったらまずいでしょ？

幸恵、宏美、紙袋の中を覗き込む。

幸恵　とりあえず生ものじゃないっぽいね。
宏美　あ、この包装紙アレだよ。あそこのジャスコに入ってる文房具屋のやつだよ。
幸恵　文房具？あー、なるほどそういうパターンか。
宏美　え、どういうこと？
幸恵　参ったなー、でもま、とりあえず預かっとこっか。店長帰ってきたら相談しよ。
宏美　うん。

そこに瑠美、亜美が帰ってくる。

亜美　ただいまー。
幸恵　あ、おかえり。
瑠美　あつーい。
宏美　思ったより早かったね。今日はもうピンポンは、
幸恵　（宏美をこっそりどつく）
宏美　……卓球は終わったの？
瑠美　ああ、それなんだけどね……実は、重大発表があります！
宏美　ええっ、
亜美　さっきからもったいぶって、全然教えてくれないの。
宏美　ちょっと待った、私も重大発表があるんだけど。
瑠美　え、そうなの。どっち先行く？
宏美　じゃんけんで。
瑠美　勝った方先ね。

宏美と瑠美、本気でじゃんけん。
勝ったのは瑠美。

瑠美　しゃおらー！
宏美　くっ、
瑠美　じゃ、私先しゃべるねー。
宏美　はいはいどーぞ、
瑠美　えーっと、この度私、藤井瑠美は……でけでけでけでけでけでけでけ（効果音）
宏美　早くしなさい。
瑠美　じゃーん、卓球部をやめることになりました！
宏美・亜美　ええー！？
宏美　ちょっとあんた、ピンポン、ゲフン、卓球やりに中央学園に行ったんじゃないの？
亜美　そうだよ。
瑠美　いや、あのさ、人生における価値観って、その都度変わるじゃん？
宏美　それにしても早すぎない？まだ7月だよ。

亜美　え、なんで？なんでやめようと思ったの？
瑠美　そこはねえ、実はもうひとつ、重大発表があるのですよ。
宏美　ちょっと、じゃんけんしなさいよ。
亜美　ここは続けて話してもらった方が、

宏美と瑠美、本気でじゃんけん。
勝ったのは瑠美。

瑠美　しゃおらー！
宏美　くっ、
瑠美　ふっ、ざぁこ。
宏美　あんたグーで殴るよ。
瑠美　私のパーには勝てない。
亜美　いいから、早く。重大発表って？
瑠美　えーっと、この度私、藤井瑠美は……でけでけでけでけでけでけでけでけ（効果音）
宏美　早くしなさい！
瑠美　じゃーん、演劇部に入ることになりました！
宏美・亜美　……はあ！？
宏美　演劇部ぅ？
亜美　なんでまた演劇？
瑠美　いやー、私が体育館で卓球やってるとさ、ステージの上に、いつもなんか変な人たちがいるのね。
宏美　変な人たち。
瑠美　うん、スター・ウォーズの音楽かけながら竹刀振り回してたり、ホント変な人たちなんだけど……なんか毎日見てるうちに、向こうがすっごく楽しそうに見えてきちゃったのね。で、今日、つい、だだだだって舞台の方に走って行って、入部します！って宣言してきちゃった。
宏美　あんたは相変わらず後先考えずに……
瑠美　みんなポカーンってしてた。
亜美　そりゃそうでしょう。
瑠美　卓球部のみんなもポカーンとしてた。
宏美　えっ、卓球部が見てる前でやったの！？
瑠美　次の瞬間すっごい勢いでボール飛んできた。
亜美　よく生きて帰って来れたね。
瑠美　でもまあそんなわけで、ひと悶着あったんだけど、部長が、とりあえず明日来てって。
宏美　え、明日？明日は早く帰って来てよ。
瑠美　なんで。
宏美　ここからは私の重大発表なんだけどね……いい？私のターンで。
瑠美　いいよ、ターンエンド。

宏美　えーっと、この度私、藤井宏美は……うふふ、うふふふふふふ、
瑠美　きもっ、
宏美　彼氏ができました！
一同　……。
宏美　あれ？
瑠美　うそつけー！
亜美　……お姉ちゃん、漫画のキャラクターは彼氏とは言わないよ。
宏美　違うっ、人間の男。
瑠美　オ、オトコだとぅ。私は信じないぞ。
宏美　それじゃあ、明日その目で確かめるんだねっ。連れてくるから。そう、それを言おうと思ったの！
瑠美　明日……！わかった、じゃあ明日は早く帰る。
亜美　大丈夫なの、それ。
瑠美　で、その彼氏はどうやってゲットしたの？
宏美　いいわよ、教えてあげる。……図書館よ。
亜美　図書館？
宏美　放課後、図書館に行って、勉強するのよ。
亜美　えっ、お姉ちゃん勉強してたの？
宏美　勉強する、ふりをするのよ。
瑠美　してないんかい。
宏美　で、いつも図書館に出入りしてるような、堅実そうな男子に目星をつけるわけ。図書館にチャラ男は来ないし、成績優秀なら将来性もばっちり。
亜美　そうなの？
宏美　で、狙いをつけた男子が、何か本を取りに本棚の方に行ったときにね、こう、こっそりついて行って、本を取ろうと手を伸ばしたときに、偶然を装って、こう！
瑠美　……どこからツッコんでいいのか。え、で、とにかくその方法で釣れたのね、男。
宏美　釣れちゃった。
亜美　だいたいお姉ちゃん、そんなに男ほしいとか言ってたっけ？
宏美　いやー、（瑠美を見ながら）人生における価値観って、変わるね。
瑠美　さっきまでさんざん私のことをけなしてたくせに。
宏美　けなしてはいない。
亜美　どう変わったの。
宏美　いや、いちおううち、進学校でしょ。女子校でさ。最初は、そこそこ勉強するつもりでいたんだよ。でもさ、これが、ついていけないわけ。こんなについていけないものなのかって、びっくりしたね。で、なんか、いろいろ見失ってたらさ、
瑠美　男がほしいなって？
宏美　……まあ間違ってない。
瑠美　ふーん、まあ、どうでもいいけど。じゃあ、とにかく明日なのね。
宏美　明日。

幸恵　……あら、

三姉妹　えっ、

幸恵　それじゃあ、このへんきれいにしておいた方がいいかしら。

宏美　ああ、いいよいいよ、いつも通りで、

亜美　えっと、その男の人は、お姉ちゃんを、図書館で真面目に勉強してる人だと思ってるのよね？

宏美　そうだけど。

亜美　ほかにお姉ちゃんのこと、どれくらい知ってるの？

宏美　まあ、うちが弁当屋であることくらいは。

亜美　お母さんのことは？

宏美　それはまだだけど。

亜美　ふうん。

瑠美　……あ！今日、阪神対巨人じゃん！私行くねー。

宏美　あ、ちょっと瑠美、待ちなさいよ。

瑠美、「六甲おろし」を歌いながら階段を登る。

宏美　歌うな！今年はドラゴンズの優勝で決まりなんだからねっ、

亜美　横浜……。

宏美、階段を上がっていく。

幸恵　あら、お客さんかしら？はーい。

幸恵、厨房へ向かう。

舞台、暗くなり、亜実だけに明かり。

亜美　私も重大発表をしたい。でも発表することがない。でもあえて、隠していることがあるとすれば、私だけがお母さんのことを覚えているということだ。お母さんは、私たちが小さい頃に、突然いなくなった。お姉ちゃんは覚えていないと言うが、私だけは、その後ろ姿を、匂いを覚えている。私がいい子にしていれば、お母さんは帰ってくる。お母さんが応援していたベイスターズがもう一度優勝すれば、お母さんは帰ってくる。そんなおとぎ話を自分に信じ込ませていた。私も人生の価値観が変わるような体験をしてみたいけど、私はいい子でいないといけないから、恋をする勇気もないし、違う世界に飛び込む度胸もない。

音楽。（ポルノグラフィティ「アゲハ蝶」）

亜実の明かり、ゆっくりと消える。

【平成１６年７月７日】

明かりがつくと、瑠美と亜美がいる事務所。

瑠美　あのさあ、いつも気になってたんだけど、
亜美　なに。
瑠美　さっき、なんて言った？
亜美　え？
瑠美　「冷たい水をください」の後。
亜美　あ、歌詞？
瑠美　うん。
亜美　「できたら愛してください」。
瑠美　あー！
亜美　え？
瑠美　私ずっと、「できたらアイスティーください」だと思ってた！
亜美　アイスティー、
瑠美　なんて図々しい奴なんだと思ってた。水だけもらえたらありがたく思えよっていうね。
亜美　それちょっと面白いね。でも待って、
瑠美　ん？
亜美　「できたら愛してください」の方がハードル高くない？
瑠美　ああ！
亜美　……愛する。
瑠美　……愛かあ。
亜美　ねえ、お姉ちゃん、愛するって、どういうことなの。
瑠美　知らないよ、愛したことないもん。
亜美　ないの？
瑠美　少なくとも彼氏はいない。
亜美　その、彼氏とか、付き合うとかって、何なの？
瑠美　特別なカンケイ？
亜美　男友達とどう違うの？
瑠美　それは……彼氏としかできないことがあるんだよ、きっと。
亜美　彼氏としかできないこと？
瑠美　それは、その、あんなこととか、こんなこととか……。
亜美　……お姉ちゃんも、あんなことやそんなことを……？
瑠美　そうよ、部屋でふたりきりになろうものなら、すぐにちゅっちゅし始めるのよ。
亜美　……ああッ！

モンモンとし始める瑠美と亜美。
戸口に佳菜子が現れる。

佳菜子　すみませーん。
瑠美・亜美　うわあ！
佳菜子　あ、すみません、予約してました、小野ですけど。
瑠美　あ、予約ですか。えーと、
佳菜子　遅くなっちゃってすみません。向こう、閉まってて。
瑠美　あ、私、ちがくて、えっと、幸恵さーん。
幸恵　はーい。

幸恵が厨房から出てくる。

幸恵　あら、小野さん、どうもすみません、今日、お店の方早く閉めちゃって。
佳菜子　何かあるんですか。
幸恵　（瑠美、亜美と顔を見合わせて）まあ、ね……。あ、いつもの、用意してありますよ。
佳菜子　千円でいいですか。
幸恵　ちょうどです。（渡しながら）上が小野さんので、下がおばあちゃんのね。
佳菜子　いつもありがとうございます。いただきます。

佳菜子、穏やかな表情で、店を出る。

亜美　今の人、常連さん？
幸恵　んー、向こうにさ、老人ホームがあるでしょ。そこにおばあちゃんが入所してて、毎月第一水曜日に面会に行くんだって。元気だから食べ物持ち込んでもいいらしくて、おばあちゃんと一緒に、大好きなからあげを、食べるの。毎回欠かさず。
瑠美　へえ。なんか人生感じるね。
幸恵　そりゃさ、みんないろいろあるんだよ。

弘治、入って来る。

弘治　……来た？
瑠美　まだ。
弘治　そうか。

弘治、落ち着かない様子で、階段に足をかける。

亜美　どうしたの。
弘治　いや、なんでも。その、俺、ちょっと、着替えたりしてるから、上、いるから。なんかあったら、呼びに来て。
瑠美　はいはい。

弘治　あ、夕方、あれ、届けに行くから。
幸恵　はいはい。
弘治　あ、じゃあ、こうしよう。その男が来たときの合図ね。ノックを、トントン、トントントン。そしたら覚悟を決めて出て行くから。
亜美　お父さん緊張してるの？
弘治　してないよ、してないけど……あのさあ。ふつう、彼氏連れてくる時って、結婚するときとかじゃない？
瑠美　人によるんじゃない？
弘治　お前らもそのうち連れてくるの？
瑠美　さあ？

弘治、階段を上がっていく。

亜美　お父さん、ちょっと変だよ。
瑠美　そーとーご乱心だね。

戸口に敦子が現れる。

敦子　あのー。

一同、驚くが、待っていた人ではなかった。

幸恵　あ、はい。
敦子　唐揚満足っていうのは、ここですか。
幸恵　そうですけど、お弁当の注文ですか。
敦子　いいえ。（外に）ちょっと、来なさい。

美希が入って来る。

幸恵　あら、昨日の。
美希　……。
敦子　なに余計なことしてくれたんですか。
幸恵　え？
敦子　昨日、ここでからあげを食べたんだって。
幸恵　そうですけど、
敦子　うちはね、この子と二人で暮らしてるんですけど、私も仕事しながらで、帰りが遅くなる時は、必ず夕飯を用意してから出てるんです。あっためて食べられるように。で、昨日帰ってみたら、珍しく残してる。どういうことか聞いてみたら、ここでからあげを食べたんだって。

幸恵　はい。
敦子　うちまで送ってくれたのは感謝しますけど、大きなお世話です。アレルギーとかあったら、どうしてくれるんですか。
幸恵　それは、すみませんでした。
美希　お母さん、違うんだよ、
敦子　違わないでしょ。
幸恵　そちらの都合を考えず、勝手なことをしてしまい、すみませんでした。それと実は、今日ちょうど、店長とお伺いするつもりだったのですが……これを。

幸恵、紙袋を取り出す。

美希　！
幸恵　忘れ物というか、お送りする前に持たせるのを忘れてしまって、すみませんでした。
敦子　（美希に）なに、これ？
美希　昨日、それ、買いに行ったの。お母さんに。
敦子　私に？
幸恵　開けてみてはいかがですか。

敦子、中身を確認する。

敦子　これは……。
幸恵　お誕生日おめでとう。
瑠美　えっ、
幸恵　ですよね？
敦子　……これを買いに行ってたの？
美希　……うん。
敦子　そう……。しっかりしてよ、もう……、
幸恵　だってさ、お母さんに心配かけちゃだめだぞ。
美希　うん。
幸恵　あ、せっかくですから、うちのお弁当、持っていきませんか。うちのからあげ、おいしいですよ。
敦子　だから、余計なお世話です。
幸恵　あらー、おいしいのに。
敦子　帰ります。美希、行くよ。
美希　お母さん、
敦子　からあげくらい、自分で作りますから。

敦子、美希の手を引いて、出て行く。

瑠美　……おっかねえ！（真似して）からあげくらい、自分で作りますから、

美希が戻って来る。

美希　あの、
瑠美　うお！
幸恵　あれ、行ったんじゃなかったの？
美希　ごめんなさい。
幸恵　どうして謝るの。
美希　お母さん、普段はあんな人じゃないんだよ。本当は、すごくやさしくて、いつも美希のために一生懸命、
幸恵　（笑って）わかってるって。
美希　え……？
幸恵　おいしいからあげを作れる人に悪い人はいない。
美希　……うん！

美希、呼ばれて、帰っていく。
それを見送る幸恵。

亜美　今の、誰かの名言？
幸恵　え？私の。
瑠美　幸恵さん！
幸恵　でも本当だと思わない？おいしいからあげを作れるならさ、

幸恵、玄関を閉めようとすると、遠くから近づいてくるふたつの人影に気がつく。

瑠美　どうしたの？
幸恵　……来た。
亜美　えっ！
幸恵　ちょっと、お父さん、呼んで来て。
瑠美　え、私。うん、わかった。
幸恵　急いで。
瑠美　えっと、トントン、トントントンだよね。
幸恵　そう！

瑠美、階段を登っていく。

幸恵　あ、私がいるの、変だよね。そっちにいるね。
亜美　ええっ、

瑠美　（階段の上で）ああお父さん、靴はいて。ああもう、スリッパでいいから！

瑠美と、ちぐはぐに着飾った弘治が降りてくる。

亜実、その服装に呆気にとられるが、努めて気にしないことにする。

亜美　お父さん、しっかりね。

弘治　オウ。

瑠美・亜美　（変な格好……。）

宏美と康秀がやって来る。

宏美　大丈夫だって、そのへんにいるオジサンだから。

康秀　でも、宏美さんのお父様なら、たいそう立派な方なんだろうなと。

宏美　はい、到着。行くよ。

康秀　え、ちょっと待ってよ。

宏美　ただいまー。

康秀　お邪魔しまーす。

宏美、康秀、中に入る。

宏美　やだお父さん、なにその恰好。

弘治　え、

康秀　あ、こんにちは。

宏美　どうぞ座って。あ、はい、これ。（ぼろい椅子を勧める）

康秀　失礼します。

沈黙。

宏美　えっと、このたびお付き合いすることになりました。ほら、名前。

康秀　森康秀です。

宏美　……他になんかないの、自己紹介。

康秀　僕、キング牧師と誕生日同じなんです。

弘治　……そうですか。

瑠美　……いつ？

亜美　1月15日。

瑠美　なんで知ってるの。

弘治　ああ、申し遅れました、父の弘治です。

瑠美　妹の瑠美です。

亜美　妹の亜美です。

沈黙。

康秀　えっと、三つ子の。
宏美　そうそう。
康秀　……似てないですね。
宏美　よく言われる。
康秀　えっと、お母様は、
宏美　あ、やっぱそうなる？えっと、いないんです。……私たちが小さい時に、いなくなっちゃって。
康秀　……そうですか。
宏美　まあ、私は何も覚えてないんだけどね。
康秀　皆さんで力を合わせて頑張って来られたんですね。
弘治　えっと、君。君は、うちの娘の、何が気に入ったんだ。
瑠美　ちょっとお父さん、結婚みたいになってる。
康秀　宏美さんのまっすぐな姿勢です。高い志を持って、毎日毎日、図書館で勉強しているんです。
弘治　高い志。
康秀　はい。宏美さんは素晴らしい教師になるという夢を叶えるために、一生懸命努力しているんです。
瑠美　！（聞いたことないよ！）
亜美　！（私だって！）
弘治　おお、そうか……。
瑠美　えっ、その、きっかけは？
亜美　お姉ちゃん。
康秀　え、それは恥ずかしいのですが……よくある話ですよ。図書館で、僕が気分転換に本を読もうと、本棚に手を伸ばしたら、こう。
瑠美・亜美　……。
康秀　運命を感じました。
瑠美　そうですか。
康秀　同い年で、線形代数の本に興味のある人がいるんだなって。
宏美　えっ、えっ、
康秀　さぞや成績も優秀なんでしょう。
弘治　え、成績？そうかなあ。
宏美　ちょっとお父さん、
弘治　ちょうど月曜に保護者懇談だったんだけどね、（棚からファイルを取り出す）ほら、こんなだよ。
宏美　ちょっと何やってんの！
康秀　……これは！

康秀、泣き出す。

一同　えっ！

康秀　そうか……宏美さんは、苦手なことを克服するために、あんなに一生懸命……！

宏美　いや、これは、そうじゃなくて、

康秀　宏美さん、僕、宏美さんの力になります。あせって高度な数学に手を出す必要はありませんよ。僕が、基礎的なところから、数学の面白さを、ちゃーんと教えますから！さあ、始めましょう！（弘治に）お部屋、入ってもいいですか。

弘治　ああ……どうぞ。じゃあ後は若いモン同士で。

宏美　ちょっと！

康秀　さあ、行きましょう。こっちですか。

瑠美　そっち厨房。

康秀　おっと、こっちでしたか。

亜美　そこトイレ。

弘治　そっち。うちの娘をよろしく頼むぞー。

康秀　はいっ！任せてください！さあ行きましょう。

康秀、宏美の手を引いて、階段を登る。

瑠美　彼氏彼女が部屋でふたりきりになると……数学を勉強し始めるのね。

舞台、暗くなり、宏美だけに明かり。

宏美　「助けてくださーい！」世間では「世界の中心で、愛をさけぶ」が流行っている。恋愛って、そういうロマンチックなものなんじゃないの。思ってた甘々の日々とは違うけど、1年以上が経った、2年の秋。私たちはまだ付き合いが続いていた。康秀はいいやつなんだけど、でもあいつはきっといざという時に、世界の中心で、愛ではなく、数式を叫びかねない。

音楽。（平井堅「瞳を閉じて」）

【平成17年11月2日】

明かりがつくと、事務所には瑠美と亜美がいる。
テーブルの上に修学旅行のお土産が並んでいて、デスクには大輔が座っている。

亜美　八つ橋うまっ！

瑠美　やっぱ名物になるだけのことはあるね。

亜美　ねえ、このじゃがポックルっていうの、見たことない。
瑠美　それね、新しいやつなんだって。白い恋人と悩んだんだけど。
亜美　両方買って来ればよかったのに。
瑠美　ちょっと亜美、
亜美　ほら、私はちゃんと、ちんすこうと紅いもタルト、両方買ってきたもんねー。
瑠美　ぐう、なんて日頃の行いのいい妹なんだ。わが妹に幸あれ。
亜美　何言ってんだか。

弘治が厨房から出てくる。

弘治　お待たせ。
大輔　わりいね、トイレ借りるだけのつもりだったのに、弁当までもらっちゃって。
弘治　ま、お代はちゃーんといただきますけど。
大輔　はい、５００円。
弘治　はい、どうも。（姉妹の方を見て）あれ、宏美は。
瑠美　ん。（トイレを指す）

宏美がトイレから出てくる。

宏美　お待たせー。
亜美　お姉ちゃん、長いよ。
瑠美　トイレでメールしてたんじゃないの。
宏美　してないよ。一通しか。
瑠美　してたんかい。
弘治　ああ、ちょうどいい。みんなも。
宏美　あ、何？
弘治　進路希望調査、ハンコ押しといたから、ほら。

弘治、デスクの上に置かれた進路希望調査を、それぞれに渡す。

弘治　みんな進学かい……大学、大学、短大。ウーン。
三姉妹　ウーン……。
瑠美　書いといてアレなんだけど、お金大丈夫？
弘治　なんとかするしかないだろ？
亜美　なんとか？
弘治　まあ。しかしみんなうちを出ていくとなるとなあ。
三姉妹　あー。
宏美　今すぐにでも出て行きたいよ、こんなとこ。
大輔　かぁぁ！

亜美　なんもないもんねえ。
瑠美　あ、でもバイトとかはするよ。生活費とか、ある程度自分でなんとかするから。ね。
三姉妹　うんうん。
瑠美　ああなんて善良な娘たち。
大輔　くぅぅ！
弘治　（車田に）うるさいよ。
大輔　わりい。
弘治　せめて家から通えるところに行くとかさあ。
宏美　それはない。
弘治　即答かよ。
瑠美　そもそも選択肢がショボすぎるんだよ。
弘治　ウーン、頭が痛い……。
瑠美　はいはい、私たちは今、打ち上げの最中なんだから、お父さんはあっち行って。
弘治　かーっ、善良な娘の言うことかよ。っていうかここ事務所。
宏美　いいじゃんいいじゃん、営業時間終了。
弘治　まったくー。
大輔　ははは、そんじゃ俺たちも、外で一服しようぜ。

弘治、大輔、外に出て行く。
幸恵が厨房から入って来る。

幸恵　お、いいねえ。修学旅行お疲れ様会。
亜美　幸恵さんも食べますか。
幸恵　え、いいの。ありがとう。
瑠美　あ、これもこれも。
宏美　八つ橋も。
幸恵　本当にありがとう。瑠美もたいへんだったね、帰って来た次の日に大会。
瑠美　マジあの日程はキツイ！（宏美と亜美に）そう、幸恵さん昨日、観に来てくれたの！
宏美　そうなの！
幸恵　うん、仕事休んでいいよって、店長が。
瑠美　本番終わって楽屋口から出たらさ、いたの、幸恵さんが。でっかいからあげの箱持って。近くの公園でみんなで食べたの、最高だった。
亜美　いいなあ。
幸恵　思ったよりずっと面白かったよ、演劇。「ロミオとジュリエット」とか、そういうのじゃなくて、
瑠美　そうそう！
幸恵　結果はどうだったの。
瑠美　優良賞。
幸恵　おお。県大会は。

瑠美　出られないやつ……。
幸恵　あー。でも私は面白いと思ったけどね。
瑠美　そんなこと言ってくれるの幸恵さんだけだよお。
宏美　審査員にくそみそに言われたんだって。
幸恵　えー？
瑠美　でも私は、来年必ずリベンジする。私が脚本書いて、後輩を県大会に連れて行くぞ！
亜美　脚本？お姉ちゃんが？
幸恵　いいねえ、どんなの書くの？
瑠美　例えば、ロミジュリみたいなのをそのままやるのはきついと思うけど、そういうのをアレンジして上演するってのはアリだと思うんだよね。
幸恵　なるほど、じゃあ、「マクベス」とか。
瑠美　実はね、それはもうあるんですよ。携帯とかメールとか使っちゃうマクベス。全国出てるよ。
幸恵　え、そうなの。おもしろ。じゃあ、「カラマーゾフの兄弟」。
瑠美　それは高校演劇でやるのは難しいんじゃないかなー。長いし。
宏美　え、読んだことあるの？
瑠美　ないけど。
宏美　ないんかい。
瑠美　とにかく、なんか書くぞ！私は！
幸恵　頑張ってね。
瑠美　おっ、気合い入ったら、トイレ行きたくなってきた。
宏美　早く行けよ。
瑠美　行きます。

瑠美、トイレに入る。

幸恵　そういえば、小野さんって、来てないよね？
宏美　あ、いつもの？来てませんね。
幸恵　ほら、今日、第一水曜日だから。来ると思って用意しておいたんだけど。
亜美　うーん、もう営業時間も過ぎてますもんね。どうしたんでしょう。
幸恵　もし来たら、呼んでね。向こうで仕込みやってるから。
宏美　はあい。

幸恵、厨房へ。

亜美　……あのね、お姉ちゃん。
宏美　どうしたの。
亜美　実は、重大発表したいことができて。
宏美　え、もしかして……（ジェスチャーで、「男？」）

亜美　（頷く）
宏美　（テンションの高まりを表すジェスチャー）
亜美　あ、でも、付き合うとかじゃなくて、好きな人ができたってだけで、
宏美　え、え、ホントに、マジで？すげえ、衝撃、ディープインパクト。
亜美　そんなに驚かなくても……！
宏美　そりゃあ驚くよー、いやー、ついに亜美にもそういう感情が芽生えたかー。わたしゃ嬉しいよ。で、どんな人なの？
亜美　実は、同じクラスの人なんだけど……演劇部なの。
宏美　おーなるほど。
亜美　だから、（トイレを見て）お姉ちゃんも知ってる人かもしれなくて。
宏美　だったらびっくりだね。リアクションが見ものだわ。
亜美　トイレ出てきたら発表するね。（緊張している）
宏美　大丈夫！？ちゃんと息吸って、ほら、すーはーすーはー。

瑠美、勢いよくトイレから出てくる。

瑠美　重大発表があります！
宏美　ええっ、
亜美　ちょっと待って、私も重大発表があるんだけど。
瑠美　お、じゃあじゃんけんだな。行くぞ！

瑠美と亜美、本気でじゃんけん。
勝ったのは瑠美。

瑠美　しゃおらー！
亜美　そんなあ。
宏美　ちょっとアンタ、阪神が優勝したからって調子乗りすぎ。
亜美　横浜……。
瑠美　えーっと、この度私、藤井瑠美は……でけでけでけでけでけでけでけでけ（効果音）
宏美・亜美　早くしなさい！／早くしてよ！
瑠美　じゃーん、彼氏ができました！
宏美・亜美　ええー！？
宏美　あの、どういういきさつで……？
瑠美　昨日まで演劇の大会だったでしょ。そこでさー、他校の部員といろいろあったわけよ。
亜美　演劇部？
瑠美　あ、亜美と同じ学校だよ。
亜美　え……。
宏美　えっと、その人の名前って……。
瑠美　あ、聞いちゃう？じゃあ特別に教えちゃうねー。葛生健太（くずうけんた）。

音楽。（鬼束ちひろ「月光」）
亜美、闇に包まれる世界の中を、ひとり深淵なる孤独（トイレ）へと向かっていく。
宏美、瑠美には為す術もない。
やがて明かりがつくと、そこは夜の事務所である。
幸恵が電話で話している。

幸恵　そうですか……どうか、気を落とさないでくださいね。あ、大丈夫です、お弁当のことは。あの、ご家族は？……はい、はい。そうですよね。……あの、また、いつか気が向いたら、うち、顔出してくださいね。待ってますから。……はい、それでは。

幸恵、受話器を置く。

幸恵　（トイレに向かって）いろんなことあるよね、生きてりゃさ。小野さんのおばあちゃん、亡くなったんだってさ。
亜美　……。
幸恵　大丈夫？ご飯も食べてないんでしょ。
亜美　……。
幸恵　初めて好きになった人かあ。遠い昔だなあ。
亜美　……。
幸恵　しゃべれる？……ダメか。あ、じゃあさ、質問するからさ、「はい」なら1回ノック、「いいえ」なら2回ノックしてよ。いい？
亜美　……。
幸恵　その人ってさ、かっこいいの？
亜美　……（とん、とん）
幸恵　ええ？カッコよくないの？じゃあ、やさしい。
亜美　……（とん）
幸恵　ああ、そういうタイプかー。そっかー。ずっと一緒にいたかった。
亜美　……（とん）
幸恵　あんなことやこんなことをしたかった。
亜美　……（とん、とん）
幸恵　またまたー。……死んでしまいたい？
亜美　……（とん、とん）
幸恵　うん。死にたくはないけど、消えてしまいたい。
亜美　……（とん）
幸恵　あるよね、そういう時。本気だったんだねえ。……私なんかが人生語るのもアレだけどさ……つらいこと、いっぱいあるよ、生きてりゃ。でもさ、なんとかなるんだよ。そういうふうにできてるんだよ。
亜美　……。

幸恵　こう考えてみて。人生は壮大なガマン大会。つらいことばっかなんだけどさ、それでも生き残った人の勝ち。賞品は、幸せになれるかもしれない抽選券。ガマン大会って言うとさ、ちょっと楽しくない？楽しくないか。

亜美　……（とん、とん）

幸恵　……今のどっち？まあどっちでもいいや。亜美ちゃんはちゃーんと幸せになるから、大丈夫。大丈夫だよ。

亜美　……。

幸恵　お姉ちゃんのことは、きらい？

亜美　……（とん、とん）

幸恵　よしよし。

幸恵、トイレのドアを叩く。（とんとん、とんとんとん）

幸恵　だめか。まあいいよ。ゆっくりウンコしな。

幸恵、佳菜子のための弁当に目を落とす。

幸恵　ねえ、からあげ食べない？小野さんのお弁当、捨てるのもアレだからさ。うちの弁当はチンしてもおいしいぞお。ま、いらないなら私食べるけど。

幸恵、トイレに目をやってから、厨房に温めに行く。

やがて、ガチャと音を立てて深淵の扉が開く。

幸恵、弁当を持って、戻ってくる。

幸恵　うお。

亜美　……。

幸恵　どうぞ。お食べ。

亜美　……ウンコしてないから。

幸恵　ごめんって。はい。

音楽。（ハナレグミ「家族の風景」）

別の場所で、瑠美に明かり。

瑠美　高校演劇にどっぷりつかった私は、これまで多くの学校が家族をテーマにした作品をつくっていることを知った。両親の離婚に揺れる四姉妹を描いた、阿部順「桜井家の掟」、ネットの掲示板を見て集まった人たちの家族ごっこを描く、大垣ヤスシ「ジャンバラヤ」。……時代は変わる、どんどん変わる。荒波の押し寄せる時代を海とするなら、家族は船だ。船は家族のみんなで作る。どんな荒波にもバラバラにならないよう、強い力で。……そして、腹はへる。どんな時にも。……それが真理だ。

亜実、からあげをつまんで、食べる。

幸恵　おいしい？

亜実、こらえきれず、泣き出す。

【平成１９年２月２８日】

やがて明かりがつくと、三姉妹と弘治、幸恵、大輔が、深刻な表情で向かい合っている。

弘治　申し訳ない。

瑠美　いや、そんな謝られても、

宏美　そうだよ、謝ったって、どうせ決まった通りにしかならないわけでしょ。

瑠美　ちょっと、お姉ちゃん言い方。

宏美　だってそうでしょ。

大輔　まあちょっと落ち着いて、

宏美　車田さんは黙ってて。っていうか、なんでいるのよ。

大輔　いや、俺は、たまたま、ウンコしたくなって、トイレ借りに来ただけなんだよ。そしたら、ほら、雰囲気的に……ねえ？（弘治に助けを求めようとするが）

弘治　……。

大輔　とんでもねえ時に来ちまったな……。

そこに、吾郎が入って来る。

吾郎　お邪魔します。……弘治さん、決まりましたか。

弘治　……。

瑠美　えっと、あなたが、溝島さん？

吾郎　はい、初めまして。この度は、急なことで驚かせてしまったと思います。

宏美　それは……はい。

吾郎　私が立ち上げる会社の相談役として、ぜひ弘治さんをお迎えしたく、相談をさせていただきました。

瑠美　あの、どうして、うちのお父さん？

吾郎　すでに聞いているかと思いますが、私は以前、弘治さんと同じ建築の会社で働いていました。バブル崩壊の前ですよ。弘治さんは、若くして営業成績も抜群。社長候補とも呼ばれる存在でした。

瑠美　社長候補！？

亜美　うちのお父さんが？

弘治　昔の話だ。

宏美　聞いてない。
弘治　言ってないからな。
宏美　なにその開き直り。
吾郎　いろいろあって、弘治さんは退職されてしまいましたが。でも、私は、弘治さんと、もっと夢を追いかけてみたかった。
宏美　そんなにうちのお父さんが好きなら、結婚したら。
亜美　お姉ちゃん。
弘治　そんなに気にくわないか。
宏美　気にくわないっていうか……わからないよ。急すぎる。そう、っていうかなんでこのタイミングなの。私たちだって、これから大学なんだよ。
弘治　だからだよ。
宏美　はあ！？
大輔　（必死でなだめようと）どーどーどーどー！
弘治　お前らもどうせ、ここを出て行くんだろ。こんなところ、今すぐにでも出て行きたいって。（吾郎に説明するように）みんな進学なんだ。宏美は千葉。瑠美は四国。亜美は宮城。
瑠美　そうだけど。
吾郎　……。
亜美　あの。会社で働くことになると、お父さんも、東京、ですよね。
吾郎　そうなりますね。
弘治　そう、俺一人でここにいてもなんだ。いい潮時だ。旅立ちの時。
瑠美　ここ、なくなっちゃうんだ……。
弘治　誰もいなくなるからな。
幸恵　……。
亜美　え、じゃあ、お盆とか、年末年始とか、私たちはどこに帰るの？
弘治　それは……東京だろ、ちゃんと部屋もある。
瑠美　そんなの実家じゃないよ。

宏美、立ち上がり、外に出ようとする。

亜美　ちょっとお姉ちゃん、どこ行くの。
宏美　あーおなかへったー、私ファミチキ買ってくるわー。
瑠美　どこまで行くのよ！
大輔　ちょ待てよ！（腕をつかむ）
宏美　うるさい！（大輔を投げ飛ばし、弘治に）そうやって人の気持ち考えないから、お母さん出て行っちゃうんだよ！
幸恵　宏美ちゃん。

宏美、幸恵、出て行く。

大輔　（立ち上がれない）コウちゃん、俺ぁ、さびしいよぉ。
弘治　……まあ実は、助かったんだ。こいつの会社なら、お金も入るからな。学費もなんとかできる。いずれここだけじゃ、ダメだ。
吾郎　皆さんにとって、それが最善の選択肢となればいいのですが。
亜美　ねえお父さん。
弘治　ん？
亜美　……もし、お母さんが、帰ってきたら？
弘治　……母さんは、帰ってこないよ。

外にいる宏美と幸恵に明かり。

幸恵　宏美ちゃん。
宏美　わかってるよ、私がワガママなのも、お父さんが私たちのために考えたんだってことも。でもさあ。
幸恵　うん。
宏美　旅に出るためにはさあ、帰る場所が必要なんだよ。
幸恵　そうだね。
宏美　それがこんなあっけなく、なくなるの……

宏美、幸恵に抱きついて、泣く。

宏美　……幸恵さんは、どこに行くの？
幸恵　え？私……、

舞台、暗くなり、弘治だけに明かり。

弘治　妻が突然いなくなった。何かケンカをしたわけでも、予兆があったわけでもない。突然、いなくなった。何日経っても帰って来ない。テレビをつければ不安になる出来事の数々が目に飛び込んでくる。どこかでテロに巻き込まれたんじゃないか。どこかに拉致されたんじゃないか。何もわからない。茫然とする俺の服を引っ張って、子どもたちが言う。「おなかすいたあ。」ああ、今、ご飯、作るからな。ぼんやりとした頭のまま、俺の手はからあげを作っていた。俺が唯一自信を持って出せる料理。無邪気にからあげを頬張る子どもたちの横顔を見ながら、俺は涙をこらえていた。「うまいか。」「まんぞく。」ああ、よくお母さんもそう言っていたっけな。ここが……俺の人生の分岐点。幸い、いくらか金はあった。俺は会社をやめ、三人の子どもを育て、そして……自宅でからあげのお店を始めた。馬鹿げた話と人は笑うかもしれない。いつしか娘たちも年頃になり、妻は俺に愛想を尽かして出て行ったのだと考えるようになってはいたが。でもそうであってくれたらどんなにいいか。元気でいてくれてさえいれば。

……美香、帰って来い。お前の好きだった、からあげを作って待ってるから、帰って来い。……そう思って、今日までやってきた。妻はまだ、帰らない。そしてたぶん、もう帰らないのだろう。

音楽。（山崎まさよし「One More Time, One More Chance」）

【平成１９年３月２０日】

やがて明かりがつくと、場面は三姉妹の出発の前夜になる。
それぞれコーラを片手に、乾杯の準備。

宏美　平成１９年、３月２０日。いよいよ私たちは本格的に別の道を行くことになりそうです。もう帰る場所も、ないみたいです。ですが、皆さん、強く生きましょう！乾杯！

瑠美・亜美　乾杯！

三人、コーラを飲む。

三姉妹　かーっ！キンキンに冷えてやがるっ！

そこに幸恵が入って来る。

宏美　幸恵さん。
幸恵　みんな、明日出発ね。
瑠美　はい。
幸恵　元気でね。もう8年かあ。一緒にいられて楽しかった。
宏美　私たちも、幸恵さんがいてくれて、本当によかったです。
瑠美　演劇、観に来てくれて、本当にありがとうございました。
幸恵　最後の舞台、瑠美が書いたやつ、本当に面白かったよ。
瑠美　また優良賞だったけどねっ！
亜美　あの、あの時幸恵さんがかけてくれた言葉、一生忘れません。
幸恵　あの時？ああ、あの時か！トイレ！
宏美　あんたのせいだよ！
瑠美　私のせいじゃない！
宏美　で、あいつどうなったの？
亜美　え、お姉ちゃん知らないの？
瑠美　別れたよ。あいつ浮気してたんだよ。サイアク。
亜美　そんな人だったなんて……。
幸恵　はは、そういうもんだよ。
瑠美　そういうお姉ちゃんは？あのガリ勉くん。

宏美　円満に別れました。私なんかと一緒にいたら、康秀に申し訳ないから。
亜美　なんかオトナ。
宏美　お姉ちゃんですから。
瑠美　そっかあ。……いろんなことがあったなあ。

一同、部屋の中を見渡す。

亜美　……ねえ、私たち、またここに集まらない？
宏美　え？
亜美　いつか日を決めておいてさ、みんなで、この場所で集まるの。
瑠美　その頃にはここには何もないかもしれないし、人んちになってるかもしれないんだよ。
亜美　それなら、それでいい。その約束があれば、なんか、生きていけそうな気がするから。
瑠美　そんな大げさな。
宏美　いつにする？
瑠美　え？
宏美　日付。いいんじゃない、その約束。
瑠美　お？じゃあいいよ、私も。
亜美　ありがとう。
宏美　じゃあいつにする？
瑠美　はいはいはい、うちの演劇部が全国出場を決めた日。
宏美　それうちらにとってなんの感慨もないから。
瑠美　えー？
宏美　あ、じゃあ、次にお札が変わった時なんてどう？
瑠美　この間変わったばっかじゃん。たぶんすっごい先だよ、それ。
宏美　そうかあ。
亜美　はい。
宏美・瑠美　どうぞ。
亜美　ベイスターズが日本一になった日。
宏美　却下。ドラゴンズが日本一になった日。
瑠美　却下。タイガース。
三姉妹　なにおう！
幸恵　はいはいはい……野球はやめない？
三姉妹　賛成。
宏美　私たち三人が幸せになった日。
瑠美・亜美　ああー。
瑠美　ん、でも待って？それ何を基準に幸せなの？
宏美　そっか、ちょっと曖昧か。
亜美　じゃあ、平成が終わる日。
宏美・瑠美　ああー。

亜美　私たち、平成が始まった日に生まれたわけだし。
宏美　いいんじゃない、私たちにぴったりで……ん？でもそれ、不謹慎じゃない？
瑠美　え？
宏美　だって、平成が終わる日って……ねえ？

天皇陛下の生前退位の話が出るのは、それよりずっと後の話なのである。

三姉妹　（ごまかして）まあまあまあまあ！
宏美　とりあえず！きっかけとして、そのへんってことで！ね！
亜美　うん！
瑠美　異議なし！……あ、幸恵さんも一緒に。
幸恵　え、私も？いいの？
宏美　当たり前じゃないですか。
幸恵　ありがとう。
亜美　あの……幸恵さん。
幸恵　なに？
亜美　幸恵さんって、ここに来る前、何をしてたんですか？
宏美　あ、それ気になってた。
瑠美　確かにー。
幸恵　そんな、語るような過去はないよ。
宏美　でも、私たちは幸恵さんのことが知りたいです。（瑠美と亜美に）ね？

音楽。（大石晶良「東京ループ」）
舞台、暗くなり、幸恵だけに明かり。

幸恵　私？私の話ね……。実はね、私も、家族がいないの。私は神戸の街に生まれて、高校卒業したら東京の大学に行かせてもらってさ、環境的には恵まれてたと思う。でもね……阪神淡路大震災って、記憶ある？あの日、私の住んでた街がめちゃくちゃになって……私は家族を失った。ひとりぼっちになった私は、それまで積み上げてきたものを全部捨てて、あちこちをふらふらとさまよう生活をするようになった。テキトーにお金稼いでさ、日雇いの仕事やったり、夜のお店で働いたり。でもさ、何をしても、私の空っぽになった部分は埋まらない。だんだん私はむなしくなって、だって何をやっても、結局、幸せなんて理不尽に奪われる。私はまっすぐな生き方なんてできなくなってた。そんな時に、偶然見つけたのが、このお店だった。人間って不思議だよね。どんなに心がやさぐれてても、ちゃんとお腹は減るんだから。あの時食べたからあげの味はね、私は一生忘れないと思う。そこに元気に帰ってきたのが、みんなだった。

幸恵の明かり、ゆっくりと消える。
宏美に明かり。

宏美　翌朝、私はこの家を出て、ひとり都会の片隅へ。新しい生活には心躍ったし、それなりに楽しく過ごしていた。でも、すぐに気づかされる。人生はそんなに甘くない。苦しい現実、リーマンショック、不透明になっていく私の未来。普通に大学を出れば、普通に就職できるものだと思っていた私は、いつの間にか迷路の中に迷い込んでいた。私はどうやって生きていけばいい？それがわからない。久しぶりに会った康秀は、自分の研究に没頭してて、すでにいろんなところから声がかかっているらしい。やっぱりできるやつだったんだよ、あいつは。私は、できない人。この時代は、できない人に対して厳しい。普通に生きるのって、そんなにハードルが高いもんなの？そんなの、聞いてないよ。……聞いてなかっただけか。そう思った時、私は初めて、自分が今まで守られていたことに気がついたのだった。

音楽。（東京事変「落日」）

別の場所で、瑠美にも明かり。

瑠美　やがて私たちも就職を考える歳になり、いろんな企業の採用試験を受けるけど、どこに行ってもうまくいかない。不採用の通知が来るたびに、私は社会に必要とされていないんだという気持ちになる。思えば私はいつも、自分を必要としてくれる場所を探していたような気がする。

また別の場所で、亜美にも明かり。

亜美　誰かを助けられるような人になりたい。自分のことだってろくにできないくせに。何も決められないまま大人になってしまった私。そんな時だった。平成２３年、３月１１日。日本を未曽有の震災が襲った。私は何かに突き動かされるように、炊き出しのボランティアとして被災地へ向かった。私にできること。大変なこともちろんあったけど、ここにいることで私は誰かの力になれる。やがて私は、現地のＮＰＯに所属することになり、その街で暮らすことになった。災害時はもちろん、普段からフードバンクの活動を計画して、食べ物が必要な人のところに届くようにする、それが私の仕事になった。そう、食べ物には、人に生きる希望を与える力があるってことを、私は知っているから。

瑠美　フリーターになった私。私がカフェでバイトしていると、偶然、演劇部の先輩がいた。私を迎え入れてくれたあの時の部長は今、アメリカのシアトルに住んでいて、小さいながら、文化交流の事業を扱う事務所で働いていた。シフトが終わった後、ゆっくり話を聞かせてもらうと、先輩がきらきらしていて、うらやましかった。それにひきかえ私は何者にもなれず、もうボロボロで……。その時、出し抜けに先輩がこう言った。もしよければ、うちで働かない？日本人のスタッフに、ひとり空きがあるんだけど。……アメリカ！私が……？行こう、演劇部に飛び込んだあの日みたいに。今までの私も、そうやって人生を切り拓いてきたんだから。

宏美　考えて考えて、私も決めた。自分のやるべきこと。私は必死で勉強して、試験に備えた。遅すぎるスタート。それでも私は、自分の可能性に賭けてみたいと思えるようになった。

瑠美　それぞれの道を歩いて行って、私たちはお互い会うことも少なくなった。会わなくても、どこかで頑張って生きているだろうと、私たちは夜の窓を見つめた。

亜美　つらい時、苦しい時も、もちろんあった。でも、そういう時、私たちは決まってこう思うのだ。

三姉妹　ああ、おいしいからあげが食べたい。

宏美、瑠美、亜美の明かり、ゆっくりと消える。

幸恵　あのからあげがあったから、私はここにいるんです。そしてあの子たちがいたから、私はまた前を向くことができたんです。勝手ですけど、ここが私のもうひとつの家族みたいに、思ってきたんです。もちろんお母さんの代わりになんてなれませんけど、でも、お姉さんになら、なれるかな、なんて。奥さんが帰ってくるかどうか、私にはわかりませんけど、でもそうでなくても、あの子たちにとって、私にとって、帰る場所はここなんです。お願いします。この、唐揚満足は、このまま残しておいてくれませんか。私は、ずっと、ここにいますから。

音楽が高まる。

幸恵の明かりがゆっくりと消え、暗転幕が降りる。

【平成３１年４月３０日】

やがて、空港のアナウンス。

明かりがつく。

亜美　お姉ちゃん、こっちこっち。

瑠美　亜美！亜美じゃん！久しぶりー！

亜美　ずいぶん遅かったじゃない。

瑠美　私は遅れてない、飛行機が遅れたんだよ。

宏美　その言い草、相変わらずだな。

瑠美　うお、姉ちゃんだ、変わってねえ！

宏美　悪かったな。

瑠美　え、え、学校の先生。お姉ちゃんが！？

亜美　しかも数学。

瑠美　うわー本当になったんだー。

宏美　（先生らしく）静かにしなさい。

瑠美　うわ、出た。っていうか、うおー、久々の日本だ！ジャパーン！

亜美　本当にうるさいよ。
瑠美　まだ桜見られる？
宏美　あんたね、もう四月三十日だよ。さすがに、遅い。
瑠美　えー。
宏美　さ、行くよ。車あっち。
瑠美　え、姉ちゃんが運転するの？
宏美　いや？
瑠美　え、じゃあ亜美？
亜美　ううん。
瑠美　じゃあ誰が。今日お父さん、忙しいんでしょ？
宏美　ふっふっふ……実は今日という日のために駆けつけてくれたの、おなじみの、運転のプロが。
瑠美　え、まさか……、
大輔　（声のみ）おーい、こっちこっちー。
瑠美　車田さん！
宏美　さ、うちに帰ろう！
瑠美・亜美　うん！

暗転幕が上がると、唐揚満足は、変わらずにそこにある。

大輔　はい到着ー。
瑠美　着いたー！
亜美　ありがとうございました。
大輔　いいってことよ。そんじゃ、俺はこれで。
宏美　え、少しゆっくりしていけばいいのに。
大輔　いーや、こっからは家族水入らずってことで、俺はいいよ。（かみしめるように）お嬢さんがたの役に立てたってだけで、俺ぁ満足だ。じゃあな。
三姉妹　ありがとうございました。

背中で返事をして、大輔は去っていく。
それを見送って、わが家の扉を開ける三姉妹。
弘治、ソファでいびきをかいて眠っている。

宏美　ただいまー。
幸恵　はーい、おかえりー。

厨房から幸恵が出てくる。

瑠美　幸恵さんだあ。

幸恵　シー、いま寝てるから。
亜美　お父さん。
幸恵　東京の会社勤めと、ここの店長の二刀流で大変なんだから。
宏美　……ありがとね、お父さん。
亜美　え？
宏美　起きてる時には言えないから。
幸恵　ふふっ。ちょっと待ってて、今からあげできるから。
三姉妹　さっすが幸恵さん！

幸恵、厨房へ向かう。
宏美、ラジオをつける。
時刻は２３時５０分、平成を振り返り、令和へのカウントダウン。（付録②）
厨房から、からあげを揚げる音。

瑠美　あと１０分で平成も終わりかー。
宏美　なんか実感ないねー。
弘治　ぐがっ。（いびき）

三姉妹、顔を見合わせて笑う。
ラジオから音楽。（Mrs. GREEN APPLE「僕のこと」）

亜美　……いろいろあったね、平成。
宏美　私たちもいつかさ、平成はよかった、って言ってみたいね。
瑠美　昭和はよかった、みたいなやつ。
亜美　それいいね。
宏美　さーて、令和はどうなるのかしら？
瑠美　絶対苦難に満ちた時代だよ。
亜美　なんでそういうこと言うの。
宏美　そうかもね……でも、大丈夫だよ。
亜美　どうして？
宏美　そういうふうにできてるから。絶対、いい時代が待ってる。
瑠美・亜美　うん！
幸恵　お待たせー！

厨房から、からあげを持った幸恵が出てくる。
盛り上がる三姉妹。
音楽が高まる。
以下、サイレント。

瑠美　うひょひょ！私このでっかいのもーらい！
宏美　ちょっと待ちなさいよ！ったく、アンタはいくつになっても……、
亜美　あの！（立ち上がる）実は、重大発表があります！
瑠美　え、今？
亜美　うん、今がいい。
宏美　どうぞ。
亜美　実は私……じゃーん！（それまで隠していた左手を見せると、婚約指輪がある）
宏美・瑠美　えええ！？
幸恵　おめでとう！

ひとつの物語が終わり、そしてまた、新しい物語が始まる。
幕が降りる。

付録①（アテネオリンピックの見どころを紹介するラジオ番組）

男　いやー、いよいよ8月13日、アテネオリンピックが開幕します。日本の選手団も、ぜひ、たくさんのメダルを勝ち取って来てもらいたいですね。

女　アテネでオリンピック第1回大会が開催されたのは、1896年のことだそうで、実に、108年ぶりにアテネに帰ってきたということですね。

男　途中、戦争などで中止になった年もありましたが、108年っていうのは長い歴史ですね。

女　齋藤さんは、今回注目している競技はありますか。

男　すごく個人的なところで言いますと、水泳の北島康介ですね。

女　あー。

男　金メダルが期待されているというのもそうなのですが、どんなタイムを出してくれるのか、とても楽しみですね。中村さんはどうですか？

女　え、私ですか？私は、卓球ですね。

男　卓球ですか。

女　はい、福原愛選手の活躍に期待大です。

男　日本勢史上最年少でのオリンピック出場となる、15歳の卓球少女ですね。

女　福原選手の登場によって、卓球のイメージはガラッと変わりましたよね。

男　今となっては卓球人口も一気に増えて、一大人気スポーツですからね。

女　元卓球部としては、鼻が高いです。

男　中村さん、卓球部だったんですか？とまあ、こんな具合に、皆さんはどの競技に興味がありますか？見どころと、曲のリクエストを添えて、お送りください。

女　それでは、ここで一曲、入れましょう。NHK のオリンピックテーマソングともなっています、ゆず「栄光の架け橋」、どうぞ。

付録②（令和へのカウントダウンをするラジオ番組）

女　時刻は23時50分となりました。平成も残すところ、あと10分です。皆さんにとって平成、どんな時代でしたか？それでは平成最後のリクエスト、平成31年、1月9日にリリース、Mrs. GREEN APPLE「僕のこと」、どうぞ。